

真人格

是人と非人

親鸞聖人、一念多念証文に善導大師の「彼仏心光常照是人」の文を釈していわく、「常照是人というは、常はつねなること、ひまなくたえずというなり、照はてらすという、時をきらわず、処をへだてず、ひまなく眞実信心のひとをつねにてらしまもりたもう。かの仏心につねにひまなくまもりたまへる弥陀仏をば不断光仏と申すなり。是人というは是非に對する語なり。眞実信樂のひとをば是人と申す、虚仮疑惑の者をば非人という。非人というは、ひとにあらずと嫌ひ、悪きものというなり。是人はよきひとと申す。」

静かにこの文を読むと、誠に厳しい人間観が出されてある。即ち眞実信心の人は是人（よきひと）といわれ、然らざる人をば非人、あしき人と言ひ、「ひとにあらずと嫌ひ、悪きものというなり」といわれる。つまり、眞実信心の人は人であつて、眞実信樂の無い人は人でないといわれるのである。ここに人とは、もちろん人間としての形相のことではなくて、人格のことである。眞実信樂の無い人は真人格でないとの仰せであらう。

あてになる人

品行方正の人もある。頭のよい人もいる。才能のたけた男もいる。男まさりの女もいる。然しどんなえらい人間でも、善良に見える人間でも、それだけではあてになる人間とはいえない。一番裏切られたと人に感ぜられる人は、いわゆる善良に見える人かも知れない。初めから悪い人が裏切つたとは誰も思わない。特に才子ほど当にならぬ人はない。然し人間は程度の差であつて、当にならぬといへば全部かも知れない。

人間は雲のようなものだ。風の吹きまわしで、今見た美しい御殿の形も、次の時には悪鬼の形相となつてゐる。人間は美しくても花火のようなものだ。消えてしまえばそれまでである。美しい心も続かず、悪い心も続かず、唯利那々々に変つてゆく。火に焼けぬ体もなく、移ろいゆかぬ心もない。変るものが集つたこの色心、それだけでは真人格とはいえない。

しかるにもし「彼仏心光 常照是人」と、常住なるもの、永遠なるもの、不滅なるものは絶対なるもの、眞実なるもの、即ち無量寿仏の心光に攝取せられ常照せられるものは金剛の信心に生きるものである。その時たよりになる真人格が生れる。蓮如上人の仰せにいわく、

「二。同じく仰せられ候。世間にて時宜しかるべきは善き人なりと雖も信なくば心をおくべきなり、便にもならぬなり。仮令たとひ片目つぶれ腰をひき候ふようなる者なりとも、信心あらん人をば頼もしく思ふべきなり、と仰せられ候。」

「世間にて時宜しかるべきは善き人」とは、世間のことなら何をさせても役に立つ才子のこと、えらい人でも頼りにはならぬ。心をおいてつきあわねばいけない。然し片

目つぶれびつこを引くような人でも、信あれば真人格である。必ず信頼して間違いはない。誠に至言というべきである。

才子は才によつて滅び、愚は愚によつて泣く、智愚の毒を仏智によつて越え、仏智に生かされて、はじめて真の人間が生れる。

真人格の本質

小さい自力のはからひに死んで、如来広大なる本願大悲智慧真実の名号に生かされる。この一大転回、即ち廻心懺悔がなくては人間にはなれない。真人格にはなれない。如来の本願の全否定の底にこそ、真人格の本質たる信が生れる。如来は真人格の本源である。

多くの求道者は私の如来を握ろうとする。それでは自力である。「私の如来」ではなくて、「如来の我」が生れるのである。「如来に帰命する」とは、如来は帰命されるもの、我は帰命するものと言うことではない。帰命は招喚の勅命であり、その招喚を聞く心もまた帰命である。即ち如来回向の心、即ち仏心である。これを信の廻向といふのである。誠に私の南無阿弥陀仏ではなくて、南無阿弥陀仏の我である。把握ではなくて撰取である。帰命するとは、帰すべきところに帰するのである。生死動乱を越えたるものに安住するのである。生きるのではなくて、生死の全てを死なぬものに托するのである。永遠性の獲得である。前念命終後念即生と、死んで生かされるのである。

真棄信心

蓮如上人云く、

「一、信心治定の人は誰によらず先づ見ればすなはちたふとくなり候。是れ其人のたふとくに非ず、仏智を得らるゝが故なれば、弥陀仏智の有り難き程を存すべき事なりと云々」(御一代聞書)

確かに誰によらず、信心の人は尊くなつて来る。然るに信心決定の人で、少しくも尊くならぬどころか、かえつてそのために高慢になる人があるのは何故であろうか。それは正しく信心を得ていないのである。ある地方によると、十年も二十年もかわらぬ、かわらぬと苦しんでいる人があるが、それは大概、重箱の隅を楊枝でほじくるような育てを受けた人であり、たまたまそれで信心を得たという人でも、少しも徳の香もなければ真人格の光もない人がある。これらは多くの場合、信心を疑なき心とは知つても、信心がまことのこゝろとしての大用を發揮してないのである。心がくつろいでいるが、真実の光が輝いてはいない。その心の奥底には、依然として久遠劫来の我執我慢自力がそのまま根を張っているのである。真実信心とは自我のはからひが何にもいらぬとわかつたことではなくて、大悲の真実が徹底し満入して、自力の癌の病根を融かして仏凡一腹の世界を成じたことである。自力が倒れて仏力が立ったのである。願力の大肯定によつて自力が全否定されたのである。真に頭が下つたのである。

眞人格の力

信がないと人が動かない。学問もだめ、権力もだめ、才能もだめ、何でも人の心を眞に動かすことは出来ない。唯、眞人格だけが人を動かす。

「聖教よみの仏法を申したてたる事はなく候。尼入道のたぐひの、たふとやありがたやと申され候ふを聞きては人が信をとると前々住上人（蓮如上人）仰せられ候ふ由に候。何も知らねども、仏の加備力の故に、尼入道などの喜ばるるを聞きては、人も信をとるなり。聖教をよめども名聞が先にたちて心には法なき故に人の信用なきなり。」（御一代聞書）、信がなければ人は動かない。ほんとうの力は徳の力であり、人格の力である。眞実信心とは眞実人格である。少しでも信が曇れば人格が曇る。